

# まちの薬局 つれづれ日記

日常の中で感じるあんなこと、こんなこと。class Aの仲間でもあるヤマグチ薬局の山口晴巨さんが、薬剤師ならではの視点でお届けします。



山口晴巨・やまぐちはるお  
大阪薬科大学卒。18年間外資系製薬会社勤務後、2011年実家のヤマグチ薬局（大阪府吹田市）の経営を引き継ぐ。

## 「ゆく人くる人」

特に用事もないのに来るじいちゃんがあります。今日は暑いなど涼みに、田舎から送ってきたとお裾分けに、散歩で疲れたなどドリンク飲みに、あ、そうそう今日は処方せんもあるのやと。今は後期高齢者のレットルを貼られています。こういったじいちゃんたちはかつてみんなバリバリの現役でした。戦後自分の力で事業を成功させた社長、地域のために1日も休まず働いたおっちゃん、シベリア抑留で辛酸を舐めた一等兵、世界を飛び回った商社マン、社交ダンスの先生、大学教授 etc. でも今では皆さん「お年寄り」として生きています。「ワシはなあ、がむしゃらに仕事したぞ。当時はなあ……」。私は「その話、何回も聞きましたよ」とは言いません。「えらいもんですなあ〜。素晴らしい」と。町の薬局というのは、それぞれが歩んできた「人生ものがたり」を大切にできる空間でもありたいと思っています。

そんな町の薬局を定点観察すると、実は赤ちゃんからお年寄りまで、カゼも難病も眼科も耳鼻科も生活習慣病も区別なく、朝から晩まで患者さんやそのご家族が出入りするスクランブル交差点のような風景に見えてきます。健康相談でもあるし人生相談でもある。在宅も同様です。HealthとLifeを分けて話すことは不可能です。育児、介護、仕事、家庭、夫婦…それぞれ全く別々の人生を歩んでいる人たちが、全く別々の健康問題を持ちながら、1つの同じ薬局を通り過ぎます。

子どもの頃に難病を発症した女性があります。大学病院や専門医にかかりながら、うちの「薬局のおっちゃんとおばちゃん」が進学も就職も結婚も見届けました。先日は無事出産したことを病院から薬局に電話で報告してくれました。また一方、働き盛りで糖尿病の男性があります。小さい子どもさんが3人おられます。HbA1cが9~10でなか

なか改善しなかったこのパパさんの数値が今回は6.6でした。いかに生活習慣を改めたか、そのサクセスストーリーを話してくれました。パパさんようがんばりなすった、という気持ちです。

「今日は50枚の処方せんがきた」というよりも「現在進行形の人生ものがたりがあった。今日はそれが50人分あった」ということでしょうか。もちろん、全員と毎回そこまで話せるわけではないですが、町の薬局たるものそのマインドは失いたくないものです。

いつもドリンクを飲みに来ていたおじいちゃんの奥様が薬局に来られました。ご主人が先日亡くなったことを伝えるに、たくさん病気をしてきたのに、いつも笑顔で逆にこちらが元気をもらっていました。人生最後の時期の薬を私が調剤させていただいたというのは薬剤師として光栄です。「よ一若社長!」とか言いながら、今にもふらっと入り口から入って来そうです。

生後6カ月の赤ちゃんとお母さんが入ってきました。初めまして。薬局のおっちゃんに笑顔をいっぱい振りまいてくれてありがとう。あなたの人生最初の薬は私が調剤させてもらったのですよ。おっちゃんは薬剤師として光栄です。

